

## 過活動膀胱治療薬における口渇発生状況

川井 亜由葉<sup>1)</sup>、齋藤 希衣<sup>1)</sup>、青木 隆<sup>1)</sup>、花田 悟<sup>1)</sup>、長久保 いぶき<sup>1)</sup>、  
寺腰 崇志<sup>1)</sup>、本波 茉耶香<sup>1)</sup>、小貫 佐和子<sup>1)</sup>、保坂 茂<sup>2)</sup>、小山 貴史<sup>3)</sup>、前田 守<sup>4)</sup>、  
長谷川 佳孝<sup>4)</sup>、月岡 良太<sup>4)</sup>、森澤 あずさ<sup>4)</sup>、大石 美也<sup>4)</sup>

1) 株式会社あさひ調剤 あさひ調剤薬局 立石 2 号店

2) 株式会社あさひ調剤 はなまる薬局 毛呂山店

3) 株式会社あさひ調剤 運営研修部

4) 株式会社アインホールディングス

【目的】過活動膀胱(OAB)の治療に用いる抗コリン薬や $\beta$ 作動薬には口渇の副作用があり、過量飲水による頻尿から治療効果や患者 QOL の低下につながるおそれがある。そこで、OAB 治療薬における口渇発生状況を調査し、薬局薬剤師の果たすべき役割について考察した。

【方法】2019 年 12 月 1 日～2020 年 3 月 31 日に、当薬局で OAB 治療薬服用患者 184 名にアンケートを実施した。項目は「口渇有無」「服薬コンプライアンス」「歯の状態」「水分摂取状況」「口渇が虫歯・歯周病等の一因であることへの認識」「口渇対策への関心」とした。結果は口渇有無で「口渇群」と「対象群」に分け、有意水準 0.05 としたカイニ乗検定、Fisher 正確確率検定、Welch's t 検定で統計解析した。

【結果】有効回答者 183 名のうち口渇群は 91 名(49.7%)、対象群は 92 名(50.3%)であり、年齢(口渇群:77.7 $\pm$ 7.5、対象群:75.7 $\pm$ 9.0、mean $\pm$ SD)、男性比(61.5%、73.9%)、コンプライアンス遵守率(61.5%、73.9%)、入れ歯使用率(部分入れ歯を含む)(75.8%、75.0%)に有意差はなかった。食事時の水分量、口渇時の水分摂取量・回数に有意な傾向差はなかった。口渇が虫歯・歯周病等の一因であることへの認識率は、口渇群(35.2%)の方が対象群(14.1%)よりも有意に高かった。口渇対策への関心度は両群ともに高く(83.5%、71.7%)、唾液腺マッサージへの関心度は口渇群(25.3%)の方が対象群(7.6%)よりも有意に高かった。

【考察】OAB 治療薬による口渇有無と患者属性(年齢、性別)、服薬コンプライアンス、水分摂取状況、口渇対策への関心は関係しないことが示唆された。しかし、口渇群のほうが歯周環境への意識や専門的対策への関心が強く、口渇へのサポートの必要性が示唆された。服用患者の半数に口渇が発生していることから、薬局薬剤師は OAB 治療薬服用患者に口渇への注意喚起と対策啓発を行い、経過観察を通して治療効果や患者 QOL の維持・改善に取り組むことが重要と考える。

(第 54 回日本薬剤師会学術大会(2021 年 9 月, Web)にて発表)